

はじめに

近年、多様な種類の災害が頻発している。たとえば、二〇一一年三月一日の東日本大震災、これを契機に起きた福島第一原子力発電所事故、二〇一四年九月二七日の御嶽山噴火、二〇一五年九月九日から九月一日にかけての関東・東北豪雨、さらに二〇一九年末からの新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行によるコロナ禍と、枚挙に遑がない。

とりわけ地球温暖化の影響によると思われる大水害、台風の大規模化が目につく。大災害を防ぐためにも我々にとつて大事なものは、地球温暖化を回避するための行動を具体的に進めていくことである。同時に、食糧不足などを含めて、今後起きるであろう災害被害を少しでも軽減させる手立てを考えていかねばならない。そのためには、災害は必ず繰り返される、あるいは必ず来るのだということを念頭に置いて、過去の災害事実を確認し、防災対策を立てる必要がある。

過去の事実を確認する最も一般的な方法は、古文書などの文字史料を媒介として事実を見つけ出す歴史学の手法である。もう一つの代表的な手法は大地の中から掘り出した遺物などによって過去を再構築する考古学である。歴史学の手法を採りたくても古文書などの史料を伝えない場所も多い。考古学的な手法はどこでも行えるわけではないし、災害の跡となると事実確定も難しい。

過去に災害があつた地域では先人たちが、後世に対して伝説という形で警鐘を鳴らしていることが多い。近年文字

史料を媒介にして災害の歴史的な実態を追求する研究が盛んに行われるようになってきているので、本書では民俗学のよ
うに口承を重視して防災について考える。

このために第一章では伝説からどのような読み取り方が可能なのかを、土石流を中心として赤牛や大蛇の伝説から
考えてみたい。

第二章では各地の災害伝説について、沖縄県、兵庫県豊岡市、長野県松本市などから確認していききたい。

第三章は災害に関係して地名などの研究、及び私がどのように災害の歴史や民俗に関わってきたかをまとめた。